

篠田恭一戦争回想録

常寧の攻撃

昭和四十九年八月十三日印刷
昭和四十九年八月十五日発行

著者
発行者

篠田恭一

発行所
(著者宅)

大阪府池田市建石町二番十八号
(郵便番号五六三)

【頒価百円】

発行予定

新関、白沙渡の攻撃（昭和18年11月）
馬峯田の攻撃（昭和18年11月）
岳麓山の攻撃（昭和19年6月）
復興隊長奮闘記（昭和19年10月～12月）
姑娘の虐殺（昭和20年4月）
金志忠の思い出（昭和20年9月～昭和21年1月）
呉淞、第五兵站勤務隊（昭和21年2月～6月）
軍隊生活挿話集（昭和17年2月～昭和21年6月）

篠田恭一戦争回想録

常寧の攻撃

（昭和十九年九月）

篠田恭一戦争回想録

常寧の攻撃

(昭和十九年九月)

はじめに

部隊の戦記や戦友会の機関誌は非常に尊い、価値のある労作である。しかしその読者がどうしても戦中派の人たちに限られがちであるので、もう一つ、若い人たちに語りかける戦争体験記が必要ではないかと思うようになった。私たちの世代がどのようにして民族の平和を守り、民族の誇りを維持しようとしたかを今の若い人たちに知ってもらいたいと思うからである。

幸い終戦二年後の昭和二十二年から高校教師をしている私は、生徒諸君から要望されて放課後やロングホームルームに、ささやかな戦争体験談を披露してきた。学校紛争がさかんで校庭に反戦の旗印がひるがえっている時でも、不思議に私の戦争の話にはリクエストが絶えることがなかった。

三十年近くもそんなことをしているうちに、卒業生諸君からそろそろ印刷してはという声がかかってきた。在学中にきいた話の保存版ということらしい。私も、右に書いたような理由で、印刷にすることは無駄でないような気がしてきたのである。

文中、上官の批判などをして、戦友会誌などを読みなれた戦中派の人たちには面白くないかもしれない。然し現代の若者のセンスではそうならざるを得ないと思うのである。また近頃、戦争を知らない年代の人が勝手に戦争のイメージを作りあげて議論などをしているが、戦場を体験してきた者からみると実に変な気がする。そんな人たちに読んでもらっても何かプラスになるようにという意識も書いているうちに当然はたらいだ。

平素話していることの速記録みたいところが多いが、一応「常寧の攻撃」からまとめてみた。一度に全部というわけにはいかないので表紙に書いたようなものをばつづつまとめていきたいと思っている。

昭和四十九年八月六日

篠田恭一

常寧死守を命じた蒋介石

部隊の先頭は尖兵長

樁部隊（第三十四師団）の岳麓山攻撃が昭和十九年六月十六日と十七日。それが見事成功して軍司令官から感状を受けることになったが、その後、樁部隊は湘江の東岸に沿って南へ南へと進撃していった。

この作戦は「湘桂作戦」ともよばれまた「大陸打通作戦」ともよばれているが軍司令部では「一号作戦」と称していた。南下する日本軍の総兵力五十一万、迎え撃つ中国軍は百万。その距離はまさに一、五〇〇軒に及んだ。

その年（昭和十九年）の八月始め頃から中国大陸にいるアメリカ空軍はますます戦力を増強して頻繁に日本軍の上空に飛んでくるので、とうとう私達

の昼間の行軍は不可能になってしまった。そこで行軍は夜、昼は森の中か村の中へ入って眠る、という昼夜入れ替えの泥棒のような生活に切りかえなければならなくなったのである。

さて、その頃、湖南省のずっと南の方にある常寧というところに堅固な陣地を築いている敵部隊があった。それは中国軍の中でも強豪といわれる第六十師で精悍な広西省出身の兵で編成されている。蒋介石はこの部隊に「常寧を死守せよ」と命じていたため日本軍の第六十八連隊が攻撃したがどうしても落とすことが出来なかった。軍司令部では第六十八連隊を急いで他の方面に前進させる予定があったので已むをえず攻撃を打ち切らせ、そのあとを樁部隊の第二百十六連隊と第二百十七連隊に引きつがせることにした。

もう常寧も近いと思われる九月二十日の夜、尖兵長を命じられた私（當時は少尉。第二百十六連隊第五中隊第一小隊長）は部隊の先頭を歩いていった。尖兵というのは、敵に向かって行軍していく部隊の一番前を進む一箇小隊（約五十人）のことで、その小隊長が尖兵長である。尖兵長の任務は、(一)尖兵の先頭、即ち部隊の最先頭を歩いて道を間違えずに目的の地点に進出する。(二)敵について何らかの徴候があれば速やかに中隊長と大隊長に報告する。(三)敵の攻撃を受ければ直ちに我が軍に有利なように戦闘を展開する。というような非常に責任重大なものであった。

歩いて眠るのも特技

夜行軍では眠りながら歩く兵隊さんが大部分であるが、そしてまたこれが古い兵隊の特技となっているのであるが、尖兵長だけは終始緊張のしっぱなしで、まだ歩きながら眠った尖兵長の話はきいたことがない。

その晩はおまけに雨が降っていた。

私は前の日の午後六時頃から細い山の中の道を、部隊の先頭になって歩きつづけていたものだから、夜が明けそめてきたのを見るとやれやれと思った。

しかしどうしたことかその日に限って大隊長山口少佐は夜が明けきっても止まれと云わない。八時になっても十時になっても歩きつづけである。全身ずぶ濡れで更に山の中のあるかないか分らないような道を、夜間、蛍光塗料をぬった磁石をたよりに辿っていたので身も心も疲れきっていた。十二時になった。まだ止まれと云わない。飯ぐらい食わせたらどうだ、と思いつながら時々振り返ってみる。峠のところなどでは馬に乗っている大隊長がうしろの方に見えることがある。雨が降っているので敵機は来ないと安心しているらしい。それにしても延々十八時間あるいたことになる。道は谷の間を匍うようにつづいている。午後二時頃になってやっと雨が上がり雲の隙間から太陽の光がさしてきた。

大隊長、この時はじめて待望の命令を下した。

「止まれ。各中隊は付近の部落に入って遮蔽せよ」

見わたすと谷間のあちこちに藁葺きの農家が点々として並んでいる。

「おい、あの大きな家に入ろう。ほかの小隊にとられるな！」

急に元気になった私は小隊の兵隊さんに大声でそう云うと真先に走りだしていた。

マラリアの発作

さてその農家の土間に入って床几に腰を下ろした私は、軍靴を脱ぐとしたときにふと背中に寒気が走るのを感じた。雨で全身が濡れているとしてもこの寒気は少し病的だ。麥だな、と思っている中に、その寒気はますますひどくなってしまいは体がガタガタと震えはじめた。

「しまった、マラリアの発作だ」

そう気付いた時、私は目の前が暗く

なった。敵陣地攻撃を前にしてマラリアに見舞われたらどうなるか。恐らくそれは死を意味するだろう。

中国大陸では誰もがマラリアを経験している。中国人は勿論、日本人も中国に来て一カ月以内には必ずマラリアに罹るといわれている。ハマダラ蚊が人の血を吸うときに他の人間の体内にあったマラリア原虫を唾液にまぜて血管内に注入するのが原因で、家の中にも草むらにもこの蚊がうじゃうじゃするほど棲息している。(日本にはいない)。マラリア原虫が体内に入ると赤血球を破壊するものだから、一たび発作が起ると約三十分間猛烈な悪寒戦慄に苦しめられる。顔面蒼白となり寒くて寒くて毛布を何枚着せてもらっても震えはとまらない。やがてその寒さがとまると今度は急激に体温が昇って四十度以上の高熱となる。汗が滝のように流れ意識は朦朧としてウワ言をいうようになる。この状態が通常三日続く。三日目から熱がひくが激しい頭痛と体力の異常な消耗のためにまともな日常

走っているのが見えた。

「篠田少尉殿。篠田少尉殿」

家の前にいた小隊の兵がこの中だと知らせている。入って来た大隊長の伝令は震えている私の前に立つと敬礼して云った。

「大隊長殿が呼びであります」

困ったことになったと思う。今の若い人なら「何も困ることないじゃないか。いま病気でずから行けませんと云えばいいじゃないか」と思うだろうが

軍隊では、特に作戦間では、そんな云い訳は出来ないのである。斥候に行つてこい、歩哨に立て、突撃せよ、と云われていま病気でずと断れるのなら誰でも断りたい。それらの任務はすぐに死につながることもある。いわば誰もが生命危篤の状態にあるのだ。それなのにたかがマラリアや腹痛や中耳炎で任務を断ることが許されていたら誰でも病気になるって戦死することを免れようとするだろう。

「よし。すぐに行く」

私はそう云って脱ぎかけた軍靴をも

生活ができるようになるためには更に数日を要する。しかも、それは決してマラリアから回復したことを意味しない。マラリア原虫は依然として人間の赤血球の中に生きていてその人間が何かの原因で疲労しすぎることがあればその隙に乗じて同じ発作を何度も惹き起すのである。

常寧市内を視察？

その日の発作の原因は、尖兵長としての十八時間の強行軍であったことはいうまでもない。さあこの悪寒戦慄がこれから三十分づきそのあとは三日間四十度以上の高熱にうなされるであろう。そうすれば今夜からの行軍はどうなるのだ。たとえ今夜は尖兵長でないにせよ(尖兵を出す中隊は毎日交替する)、そんな状態で自分の体重より重い背囊をせおって行軍することが出来るだろうか。

思い悩んでいる時に、私がいる家の前を大隊長の伝令が大声をあげながら

う一度はき、革脚絆をつけ軍刀を吊って伝令のあとにつづいた。

大隊長は二百米ばかり離れた農家の一室でひとり地図を拡げていたが、私を見るなり云った。

「ここから常寧までは十軒余りだ。俺はこれからちょっと常寧まで行って市内を視察しようと思う。貴官は俺と一緒について来い」

私は大隊長が気が狂ったのではないかと思ひ恐る恐る訊ねてみた。

「常寧には敵がいるのではありませんか」

「この地図を見ろ」

大隊長は私を机の傍へよんだ。

「この峠まで行くと常寧の市街が見下ろされる筈だ。俺はこの峠まで行って常寧市内を視察しようと思うのだ。貴官は都下一箇小隊をひきいて本官の護衛に来てもらいたい。ところで、もう飯は食ったか」

「まだであります」

「それでは至急兵にも食事をさせて三十分後に道路上に整列しておれ」

攻撃目標が発見できない

森の中の一本道

十分後、整列していると大隊長がやってきた。馬に乗ってやってきた。頭右ツと部隊の敬礼を行うと、馬の上から大声で云った。

「只今より常寧城の視察に行く。篠田少尉。貴官は先頭を行け。俺は一番うしろから行くぞ」

ところがいくら歩いてても常寧の市街はおろか城壁も見えてこない。第一そんな峠らしいものにも出くわさない。深い松林の中を幅三米ばかりの道がうねりながらどこまでも続いている。ヘンゼルとグレーテルが森の中で魔法使いの老婆に出逢う童話があるが、丁度そんな気味の悪い松林である。三時間ばかり歩いたが松林はいよいよ深く道

は蜿蜒としてつづいている。時間的にみてももう常寧を通り過ぎてしまっている筈である。もし敵がわれわれに気付いて退路を遮断すれば一箇小隊は大隊長もろとも全滅することは明らかである。

私は道路わきに出て小隊をやりすぎし、大隊長が近づくのを待って敬礼して云った。

「大隊長殿。この道は少しおかしいと思います」

「おかしい？ そんな馬鹿なことがあるか。行け、行け」

腹が立ったが仕方がない。私がマリリアの苦しみに耐えているのを大隊長は勘がいて、むくれているとでも思ったのかもしれない。風当たりが馬鹿に強い。私は仕方がないので駆足で小隊の先頭まで戻って歩きつづけた。

すると五分もしないうちに大隊長が怒鳴った。
「止まれ。篠田少尉、この道は少しおかしいではないか。貴官は松林の中へ入ってほかに道がないか調べて来い。」
兵は道路わきによって休憩」
大隊長は自分も馬から下りると伝令が上げた毛布の上へあぐらをかいて坐りこんでしまった。

瀕死の重病も治す秘訣

私は松林の中へ一人ではいっていった。そして斜面を下りながらマリリアはどうやら直つたらしいと思った。何が幸いになるか分らない。十八時間雨の中を尖兵長として歩きつづけて、その間は緊張しているので出なかったマリリアが休息してやれやれと思った瞬間に発病した。ところが丁度よいタイミングで大隊長が護衛の命令を出してくれたから再び精神が緊張してマリリア原虫の働きを抑えたのである。これは非常に大きな教訓である。どんな瀕

死の重病病人でも、担架に乗せられて運ばれていくとき、突如近くの丘の上から敵の射撃を受ければ、担架からおりて自力で疾走し、その異常な緊張感から病氣はケロリと治るのである。もし治らないとすれば、助かったと思った瞬間また担架に乗せられて病人扱いされるからである。ウソだと思う人は一度ためしてみるとよい。その代り弾丸にあたることもあるかもしれないが、あたって死んでもともとではないか。

丘の上に敵兵が

さて一人で松林の中を歩いていくとだんだん下り坂になった。それを下りきると松林がとだえて小川が流れている。そんな時、無造作に松林から小川の岸まで飛び出たはいけな。どこから弾丸がとんでくるか分らないからである。猫が路地から出るときによくやっているように、先ず顔だけわずかに出して左右をよく確かめる必要がある。

それをやっていると、前方に碗を伏せたような低い丘がありその上に一人の男が立っているのを認めた。手に何か持っている。棒かもしれない。銃かもしれない。敵兵だろうか、日本兵だろうか。どうしたら分るか。「おいお前は日本兵か？」などと聞くわけにはいかない。どうしても分らなければ前方に飛び出していつて踊つてみせたらいいだろう。もし撃つてきたら敵である。一発目が中ることは滅多にないからこの方法も悪くはないが日本兵がここまで来ていることを敵に知らせることになるのでなるべく避けた方がよい。私が将校斥候などにいつていつもとった方法は、何分かのあいだ観察をつづけることであつた。どんな現象でも五分と同じ状態がつづくものではない。必ず何か変化が起りそれがこちらの知りたい問題に答えてくれる。

その時は、飛行機の爆音がきこえてきた。俗にバタバタと呼ばれている日本軍の一人乗り小型機である。翼に日の丸をつけている。すると、丘の上の

男はそれを見てさつと灌木の間に身をかくしてしまった。日本軍の飛行機を見て隠れる奴は敵にちがいない。私は急いで大隊長のところへ帰ると報告した。

「大隊長殿。向うに敵がいます」
「なに、敵がいる？ そんな馬鹿なことがあるか」
「本当です。一度一緒に行つて見ていただきます」
「いやその必要はない。全員立て。これから宿営地に帰る。俺は先頭を行くぞ、貴官は一番うしろから来い」
大隊長は馬にまたがり、いま来た道をどんどん戻つて行つてしまった。

勿論こんな風に書いたからといって大隊長が非常に利己的な且つ鉄面皮な人であつたということにはならない。軍隊では指揮官は将棋の王将のようなもので、指揮官が戦死すればその軍隊は敗北の運命にある。敗北すれば鳥合の衆と化した部下の多くは恐らく戦死をまぬがれないだろう。従つて、指揮官を一番安全な位置におくことは当然

のことであった。指揮官もまた自らそれを口にして憚らないだけの強い個性が要求される。

ただ第一線小隊長だけは別である。第一線小隊長は、さきに述べた尖兵のときに限らず常に部下の先頭に立たなければならぬ。突撃のときは軍刀一

敵陣を睨んで十日間の休暇

頼りにならぬ地図

大隊長は苦慮したことを思う。連隊長から常寧攻撃の命令を受けながら、その常寧がどこにあるのか分らないのだ。そこでその夜、各中隊長を集めて必死になって常寧へ行く道を搜索せよということになった。すると、ある中隊が宿営していた村に一人の老人がいて常寧へ行く道を知っていると洩らしたのである。大抵の村民は日本軍が来

閃、必ず誰よりも先に敵陣に斬り込んで行かねばならない。私がその第一線小隊長であった。常寧の攻撃の話を通じて、日本陸軍の第一線小隊長が如何にしてその任務に耐えてきたかを、分ってもらえれば幸いである。

と戦争が起ることを恐れて逃げてしまふのだが、この老人、独り自分の家を守って村に残っていた。日本の田舎にもときどき見かける頑固爺さんである。その中隊では、この爺さんをなだめたりすかしたりして道案内をさせることに成功し遂に常寧へ行く道を明らかにすることが出来た。

なんと私が大隊長と一緒に行ったのとは全く反対の方角になっていて、あの地図は出鱈目そのものだったのである。これは中国側が日本軍を欺くため

にわざわざ出鱈目の地図を作ったのではない、もともと中国軍自体の軍事目的のために作られた地図であったに拘らず測量担当者の甚だしい手抜き仕事のためにこんなものが出来上ったと考えられる。

夜が明けてから大部隊が動いたのは米軍機に発見される恐れがあると思つたのだろう、大隊長は各中隊に真夜中に起床を命じ直ちに常寧陣地の西側の台地に進出させた。

その台地のの上に立った私たちは夜が明けてみて驚いた。前方一杆のところに出現した敵陣地の規模の雄大さ。さすがに第六十八連隊が攻めあぐんだだけのことはある。高さ二百米ばかりの碗を伏せたような丘が正面に三つ並んでいて、そのどれもが電柱のような材木を無数に使って幾重にも柵をほどこしている。

日ましに強化される敵陣地

だから一見したところどの陣地も針

ねずみのようだ。そしてその中で百を数える敵兵が更に塹壕を掘りトーチカを作っている。壕を掘った土をドンゴロスの袋につめ、それを積み重ねてトーチカを構築している有様は蟻にそっくりである。

その三つの丘の右端に馬鹿に高い岩山が天を突くばかりに聳え立っているのが見えた。これは人間が登れるようなシロモノではなくて岩肌には苔がむして青く光り頂上は雉のように尖っていた。連隊本部の地形図によると鷺湖嶺と名づけられている。

命令受領者が連隊長の命令をもってきた。

「攻撃は約十日後に行く。それまでゆっくり休養しておくように」

これは兵の心に肩すかしを食わせるような命令であった。眼前に堅固な陣地を見せつけられて、今夜にも夜襲をしかけるのかと思っていた兵士たちは「ゆっくり休養せよ」と云われても気が落ちつかないのであった。

「あんなごっつい陣地、はよ攻めなあ

きまへんで。十日もほっといたら、戦車を使おうが火焰放射器を使おうが、絶対に取れんようになりまっせ」

小隊の下士官が我慢できないという顔で私に抗議した。

歩兵砲の砲隊鏡をかりて覗いてみると、太い丸太ン棒の柵の外に、鹿の角のような木を逆木にして、いわゆる鹿砦がめぐらされている。

いよいよ攻撃の火蓋を切る

老連隊長先頭に立つ

そして宿命の十日がたった。昭和十九年九月二十九日の午後二時、連隊長石川明大佐は第二大隊の小隊長以上の幹部を台地上の、敵からは見えない樟の木立のかげに集合させた。

「明日、攻撃を行う。敵は我が軍がこの台地から攻撃を開始すると思ってお

る。然しそうはしない」

連隊長はいきなり青く光っている鷺湖嶺を指さして、

「あの岩山の頂上から攻撃する。あの岩山は一見登れないようであるが実は登れるのである。俺はさっき登ってきた。これからあの岩山の頂上まで行って攻撃要領を説明するから貴官たちは俺について来い」

老連隊長石川大佐は、思わず顔を見

合わせている青年将校を尻目にして堂々と胸を張り鷺湖嶺に向って歩きだした。よく晴れた初秋の午後である。空

気はいやが上にも澄みきって湖南省の風景は絵のように美しい。

鷺湖嶺の麓に到着。連隊長が振り向くもせず先頭を切って岩壁を攀じ登っていく。第二大隊の中隊長小隊長たちがそれにづく。岩山の断崖絶壁を登ることは危険この上もないが、なるほどいざ登ってみれば登れないこともない。

一時間余りで頂上に到着。三角錐のようにとがって見えたのは幅広い高地の側面だけを見ていたからで、登ってみると鷺湖嶺は、頂上に一箇大隊の兵力を集結できる平坦な場所を持っていた。そこから碗を伏せたかたちの敵陣地が五つばかりパノラマのように見下ろせる。西側の台地から見えていたのより数が多い。トーチカ、鹿岩、交通壕、丸太ン棒の柵、万全の防禦態勢である。一度六十八連隊を陣前に撃退しているから防禦に自信のほどがうかが

われる。その陣地群の向う側に隠れるように、常寧県城が城壁に囲まれて静かに横たわっていた。

「平家の陣屋は真下に見えて大將義経まっさきに」という小学唱歌の一節を思い出す。連隊長は鶴越（ひよどりこゑ）の古事に倣うつもりらしい。わが第五中隊はこれらの陣地のうちどれを攻撃することになるのだろうか。

「その一番手前の陣地をイヌの陣地と名付ける。その向うがサル

の陣地だ。その右手がネコの陣地……」

連隊長が説明をはじめた。

第五中隊の攻撃目標

「今夜各中隊は三時起床。この頂上に集結せよ。天明を期して第八中隊から攻撃を開始する。第八中隊の攻撃目標はイヌの陣地だ。イヌの陣地の占領が終れば第五中隊はイヌの陣地まで進出してそこを拠点にサルの陣地を攻撃せよ」

私は大きく頷くと思わずその敵陣地

に注意を集中した。黒い銃眼をもったトーチカが幾つもあってどの方角から攻撃されても完璧な防禦が出来るように構築されている。そのトーチカを

たまたまることだろう。とすればあ

たりだな、と陣地の一角を凝視した。

しかしあの電柱のような丸太ン棒の柵はどうして突破すればよいのだろう。

松下中隊長が口ぐせのように云っていた課題がいよいよ現実の問題となって私の前に立ちはだかってきた。

「歩兵砲は分解して当地点まで引き上げろ。あの柵と鹿岩は歩兵砲中隊が火焰弾で破壊して突撃路をつくれ。各陣地とも右に一つと左に一つだ」

火焰弾が命中すればあんな柱でも燃えてしまうのだろうか。私は歩兵砲の知識がなかったから多少不安であったがこうなれば火焰弾の威力に期待するより仕方がなかった。昭和七年の上海

後でもあった。

翌朝は連隊長命令の通り午前三時起床。第五中隊は鷺湖嶺の頂上に集合した。第五中隊の前にはすでに第八中隊が

一列横隊になって発進の準備を完了している。

いよいよ午前四時二十分。第八中隊は一列横隊のまま目の前の崖を下りていった。かすかな足音はやがてきこえなくなつて視界はたちまち闇に包まれてしまふ。彼らの姿を再び見る事が出来たのは約一時間のち、夜が明けはじめた五時三十分頃である。

第八中隊はすでに岩山を下りきつてイヌ陣地の中腹にさしかかっていた。

右第一線、左第一線に分れてジリジリと鹿岩にせまっていく日本軍に気付いた敵兵は上から手榴弾を投擲しはじめた。手榴弾は散開した日本兵の間に落ちて、白い煙がパツパツとあがる。すでに距離は五百米以上もひらいてい

るので音は同時にはきこえてこない。激しい手榴弾の雨をくぐりながら第八中隊の将兵はなおも敵陣地にせまってい

事象のとき廟行鎮の敵陣を攻撃する歩兵のために鉄条網を排除して突撃路をひらくとした久留米工兵隊が、爆薬筒三本を縦につながわせて竹で巻きこれを鉄条網にさしこんで爆破しようとした。しかしこの方法ではどうしても突撃路を開くことが出来ず遂に肉弾三勇士の犠牲を出したことは有名である。

「三十分したら下山する。それまでに写真図を書いておけ。兵は攻撃開始まで敵陣地の状況が分らないのだから帰ったらその写真図を見せて説明せよ」そろそろ夕焼けがひろがりはじめ明日は死闘の舞台となる敵陣地も今は美しく夢のような色合いに染められていた。

佐藤准尉

私は岩の上へ腰をおろして通信紙のうらへ写真図の鉛筆を走らせていた。すぐ横には第八中隊の佐藤准尉が同じように鉛筆を走らせている。気の強い

「どうもすみません」

佐藤准尉は丁寧に頭を下げてそれを受けとり描き終るとまた丁寧に礼を

いって返した。私と佐藤准尉とがこんなに好意をもつて物を云いあったのは初めてであった。そしてまたそれが最

「あつ折れましたね」

私は反射的に自分の鉛筆をさし出した。

写真図を描きおわった私は、なんとなく佐藤准尉の鉛筆の先を見つめていた。その時ポキンとその鉛筆の芯が折れた。

事あるごとに雌雄を決しようと張りあった。特に戦場での功名合戦はすさまじいものがあった。

写真図を描きおわった私は、なんとなく佐藤准尉の鉛筆の先を見つめていた。その時ポキンとその鉛筆の芯が折れた。

私は反射的に自分の鉛筆をさし出した。

「どうもすみません」

佐藤准尉は丁寧に頭を下げてそれを受けとり描き終るとまた丁寧に礼をいって返した。私と佐藤准尉とがこんなに好意をもつて物を云いあったのは初めてであった。そしてまたそれが最

く。右第一線、左第一線。そして中央後方に予備隊一箇小隊。逆三角形となつて次第に鹿砦との間隔が縮まっていた。左第一線の先頭は第二小隊長の佐藤准尉である。

突撃路ひらく

すぐ横の歩兵砲が轟音と共に火焰彈を發射した。見事にそれは敵陣右前方の丸太ン棒の柵に命中。数本の丸太ン棒が空中高く舞い上り、そのあとを双眼鏡で見ると残った部分は黒く焦げて幅二米ばかりの突撃路が出来ていた。なおよく見ると柵だけでなく手前の鹿砦も燃えてしまつて通過可能になっている。これなら大丈夫、と私は安堵した。私が攻撃するときの突撃路のことをずっと気にしていたからである。つづいて左第一線前方にも突撃路が出来た。二つの小隊はそれぞれの突撃路に向つて接近していく。敵の手榴彈投擲はますます激しくなる。突撃路との距離は約五米。いよいよ突撃準備に入っ

敵弾が夕立のように

さあ私たち第五中隊の番である。
「ほな、ぼつぼつ行きまひよか」
私はわざとリラックスして松下中隊長に声をかけた。そうでないとな部下の兵隊さんが堅くなつて攻撃に不安感を抱くからである。

中隊長がうなずく。私は第一小隊の先頭になつて岩の急斜面を滑らないように注意しながら下りていった。

もう八時の太陽が正面から照りつけているから天明攻撃を敢行した八中隊の時よりはつと足元は楽である。それでもかなり峻しい。八中隊はよくも暗闇のなかを転落もせず下りていったものだと思う。私たちがおりていくのを八中隊がイヌの陣地から見上げている。今度はこっちが見られる番だ。あまりぶざまな格好は出来ない。
イヌの陣地に着いた。

「敵情を見ようか」

松下中隊長が私のそばへ来たので、

て兵は銃の先に剣をつけ小隊長は抜刀した。折から朝日がのぼり日本軍の鉄帽、銃剣、軍刀ををらしてキラキラと反射するさまはフィルムにでもとって記録しておきたくなるような感動的な光景であつた。

佐藤准尉が軍刀を振り上げて突撃路の中へ飛び込んだ。トーチカからは敵の機関銃が狂つたように射ちまくりトーチカのうしろに陣どつた敵兵はしきりに手榴彈を投げてくる。日本兵も手榴彈を投げて突撃の機をつかもうとするが敵の抵抗はすさまじい。とうとう佐藤准尉がトーチカの壁にとびつき銃眼から手榴彈を投げこんだ。銃眼から噴き出る黒煙。恐らくその瞬間をのがさず突撃の号令を下したのだろう、軍刀を振りかざした佐藤准尉は銃眼に足をかけるとトーチカの上によじのぼつ

あのトーチカを撃て

二人ならんで双眼鏡を目にあてサルの陣地の方をうかがつてみた。そのときパパンと二、三発足元へ来た。

「おい、危いわ」
「狙われましたね」

中隊長は今度は伏せの姿勢になつて双眼鏡を目にあてた。私もそれにならう。「ウーム」思わず唸り声が出る。凄いい陣地である。真正面に大きいトーチカがあつて、独眼竜のような銃眼がこちらを威嚇するように睨みつけている。

いつの間にか私たちの横へ機関銃中队が進出してきて射撃準備を始めた。小銃中队の軽機関銃にくらべると重機関銃は大きく頼母しい。

「親方たのむぞオ」

五中隊の兵が機関銃中队の兵によびかけている。機関銃中队の中隊長横山中尉は仲々の人格者でまたハンサムな人だつた。その時もあまり小銃中队の兵が親方親方というので美しい微笑をうかべて私たちの方を見ていたがその顔が忘れられない。

た。すぐ目の下に群がる敵がいる。部下の下士官兵が佐藤准尉につづこうとしたとき佐藤准尉が倒れた。

「准尉さんがやられた」

私の横にいた五中隊の兵が思わず叫んだ。皆、手に汗をにぎつて友軍の奮戦を見つめているのだ。

「手榴彈をよけるために伏せてはんねん」

別の兵が云う。

「いや、あの格好は只事やない。あかん、やられはつたわ。ほんまにやられはつたわ」

それが佐藤准尉の最期であつた。

激しい手榴彈戦はなおも続いたが次第に敵は後退しはじめ、遂に陣地を支えきれなくなつてサルの陣地（ノ）の方へ集団となつて逃げていつてしまつた。

「小隊長集合」

松下中尉が、腹に力を入れてどなつた。

「第一小隊長現在地」私が云つた。

「第二小隊長現在地」西川准尉が云つた。

「第三小隊長現在地」中森曹長が云つた。

「よし。中隊は只今より前方の敵陣地を攻撃する。第一小隊は右第一線となり敵陣地の右前方より突入せよ」

私が復誦する。

「第二小隊は左第一線となり敵陣地の左前方より突入せよ」

西川准尉が復誦する。

「第三小隊は予備隊となり第一小隊第二小隊の後方を前進せよ」

中森曹長が復誦する。

私は丘の右斜面の小隊の位置へ戻つてきた。そこではすでに各分隊長が指揮して歩兵操典どおりの散開を完了している。私は云つた。

「第一小隊は中隊の右第一線となり前面の敵陣地を攻撃する。第一分隊は右

第一線、第二分隊は左第一線となり小隊の前方を前進せよ。第三分隊は第一分隊の後方を前進せよ。第四分隊は第二分隊の後方を前進せよ。小隊長は第一分隊の前方を前進する」
各分隊長が復讐し終るや、
「攻撃前進！」

私は大声に叫んで丘の上を走り抜け敵に向う斜面を駆け下りようとした。しかしその斜面全体に夕立の雨脚みたいにしきりに土が跳ねあがっている。勿論敵の重火器の弾著である。

軽機関銃手広口兵長

こんな所を駆け下りたら全身蜂の巣みたいになるにきまっている。それでは敵陣地を攻略することが出来なくなるからそこで立ち止って一思索した。
「弾丸に当らんでこの斜面を下りる方法はないかいな」

すると中隊長が怒鳴りつけた。

「何しとんねん篠田少尉。はよ行かんか！」

「こんなとこ、行けまっかいな！」

私も負けずに怒鳴り返す。有難いことに中隊長は黙ってくれた。私は双眼鏡をとり出してもう一度敵陣を偵察した。ヒュンヒュンと敵弾が耳のそばをかすめる。撃ってくるのはあのトーチカにちがいない。よしあの銃眼を広口兵長に撃たせてやろう、と決心がついた。広口兵長は中隊きっての軽機関銃の名手である。重機関銃が撃てくれば一番いいのだがこれはよその中隊のものであるから私の権限外だ。

「広口兵長前へ」

私が呼ぶと彼はこのこと軽機をさげて歩いてきた。田舎者で、大胆不敵なところがある。

「あのトーチカの銃眼を撃て。あの重火器を制圧し次第、小隊は直ちに前進する。しかし貴公と一緒に前進しなくてもよい、弾薬手と共にあとから追及せよ」

「へーい分りました」

広口兵長は再び軽機関銃を片手に下げると丘の一番高いところへのぼって

いく。
「危い。そんなところへ出たら危いじゃないか」
敵から見て空が背景になる位置は照準され易いのだ。

「大丈夫でござす」

彼は丘の頂点に軽機の脚位置をきめると敵の銃眼めがけて鮮やかな三発点射を開始した。タンタンタン。タンタンタン。誠に頼母しい。見る見る目の前の敵の弾著が消えていく。

「攻撃前進！」

私はそういって斜面を駆け下りようとした。

「待てえツ」

そのとき中隊長が叫んだ。

「待てとは何だ！」

興奮していた私は中隊長にかみついた。

「広口がやられとるツ」

「なに？」

思わず振り返ると、今まで元気に射撃していた広口兵長が俯伏して足をばたばたさせている。

「おい広口、しっかりしろ！」

走りよって顔を仰向けると目がつりあがってしまつて物がまともに云えない。鉄帽の真ん中に穴があいていて、それを脱がすと中にたまっていた血がどっと溢れ出てきた。

「衛生兵前へ！」

指揮班に向つて叫ぶと上田衛生兵が走ってきた。

「広口を頼むぞ。俺は行くからな」

再び小隊の位置へ戻つて、

「おい、みんな！ いま広口がやられた。広口の仇討ちだ、行くぞォ！」

まっしぐらに斜面を駆け下りた。小隊全員の足音があとに続く。あつというまに斜面を駆け下りて二つの丘の間の谷になっているところへ集結した。その付近は死角に入っていて敵の弾丸はとどかない。誰もやられなかっただろうか。

「第一分隊、異常ないか」

「広口のほか異常なし」

「よし。第二分隊異常ないか」

「異常なし」

第三分隊も第四分隊も異常なしだ。
「よし。それでは登るぞ。敵は手榴弾を投げてくるからよく上に注意しておれ」

白刃きりめく決死の攻防戦

突撃を阻む手榴弾

第二小隊はどうしているだろうか。

左の方を見ると、約五十米はなれた山肌を西川准尉が先頭になって登っているのが見える。彼我は互に五角に進んでいる。負けられない。少尉と准尉の宿命の対抗意識がある。

これは一つのゲームでもあった。階級が上であっても、また先任の小隊長であっても、実戦で後れをとれば頭があらなくなる。日本内地にいる部隊や外地にいる部隊でも警備だけをしてる部隊なら星の数だけが物を云った

登りはじめた。匍うようにしながら石の多い急斜面をのぼっていく。この土のつづきに敵がいると思うと土まできが不気味である。

ろうけれど、実戦部隊には実力で勝負しなければならぬ厳しさがあつた。

西川准尉も此方に向いている。私より年令も上。軍隊生活も長く、戦場の経験も豊富な西川准尉。同じことを考えているのだらう。二人は男の意地をかけて陸上選手のように競いあつた。しかし陸上競技とちがうところは、前方に更に共通の敵がいて、ゴールラインと共に新しい決闘が展開されることである。

突然、目の前で敵の手榴弾が炸裂した。手榴弾が炸裂すると七米半径内の人馬を殺傷する。危なかったと思いがらふと上空を見ると、また別の手榴

弾がゆらゆらと黒い鳶のようにまいお
りてくるところである。あわてて右の
方へ転がりよってピンチを脱した。

九月末というのに、いやに暑い日で
あった。時刻はまだ十時少し前だとい
うのに手に触れる山肌の石が熱く焼け
ている。

中腹くらいまで登ると丸太ン棒の柵
の頭が見えてきた。いよいよ敵は近い
なと思う。陣地の大きさは今更のよ
うに驚いた。遠くで見た時の、砲を伏
せたような丘という印象はなくなつて
どっかと大地に根をおろして地底の音
を伝えているような重圧感がある。

やがて柵の中程までが姿をあらわし
た頃、頭の上を歩兵砲の火焰弾が通過
した。はっと息をのんだ瞬間、落雷の
ような響きと共に五、六本の丸太ン棒
が秋空高く跳ね上るのが見えた。そし
てカラカラと音を立てながらそれらは
右側の斜面を転がり落ちていった。

背伸びして見ると、見事に突撃路が
出来ている。黒く炭のように焦げてそ
の前の鹿砦も焼き払われていた。

手榴弾は相変らず前後左右に炸裂す
る。誰も負傷しないのが不思議なくら
いだ。

左第一線前方にも突撃路がひらかれ
た。さあどっちが先に突撃に踏みきる
だろうか。うしろの陣地からは第八中
隊と機関銃中隊が、そして鷲湖嶺の頂
上からはまぎれもなく連隊長と大隊長
が見ているに違いないのだ。私はあせ
つてくる気持をどうしても抑えること
が出来なかった。

遂に、鹿砦の焼け残りに手の届くと
ころまでやってきた。柵の向こう側か
らは敵兵の瘤高い声が聞こえてくる。
私は軍刀を抜いた。それを見て分隊長
も兵も剣をぬいて銃の先につけた。い
よいよ突撃準備完了である。誰の顔に
も決死の表情がうかがえる。

その時、左第一線のところで西川准
尉の声がした。

「突撃にイ進め！」

私ははっとした。思いがけなかった
のである。然し西川准尉の号令が終る
か終らないうちに、夥しい数の敵の手

榴弾がその周辺に集中した。第二小隊
の先頭の部分は硝煙に蔽われて何も見
えない。次第に煙が薄らぐと、軍刀を
杖にして前方を睨んでいる西川准尉の
姿が目に入ってきた。准尉は再び号令
を下した。

「突撃にイ進め！」

然し結果は同じだった。手榴弾が相
次いで炸裂し突撃は不能だった。西川
准尉はそれでも根気よく何度も突撃の
号令を繰り返した。

私は第一小隊の兵士に云った。
「いいか。手榴弾が炸裂しても止まる
な。突込んでいけ。絶対に止まるな。
俺のあとについてくれればいいんだ」

全員うなずくのを確認して私は叫ん
だ。

「突撃にイ進め！」

軍刀を振りかざして突撃路の中へ飛
びこんでいった。どかん、どかん、ど
かん、と四方八方に手榴弾が爆発した
が云った本人が止まるわけにはいかな
い。前進しつつ後ろを振り返ってみた
ら驚くかなれ誰もついてきていないで

はないか。

「隊長殿」

柵の外から呼んでいる。

「何だ！」

「戻ってきて下さい」

「何を云うとるか。入って来い！」

「行けません」

私は仕方なしに突撃路を通ってまた
柵の外へ出ていった。

「ついて来いと云ったじゃないか。あ
れほど云ったのに分らんのか。もう一
ぺんやる」

私はもう一度突撃の号令をかけて突
撃路の中へ駆けこんでいった。然し東
側になって足元へ飛んでくる手榴弾に圧
倒されて、誰も柵の中までついてくる
ことが出来ない。私はまた引き返さな
ければならなかった。こうなれば小隊
長は叱咤激励するより方法がない。

「腰抜け！ 貴様らそれでも日本男子
か。敵が笑うとろぞ。今度は号令をか
けないで突撃する。号令かけなんなら
敵も手榴弾放ってけえへんやろ」

私は軍刀だけ振りかざして無言のま

まで柵の中へ入っていった。中西軍曹
藤崎兵長らがそれにつづいた。

陣内の決戦

その時、私たちは例のトーチカの前
方約五米のところにまで来ていたのだ
であるが、実はその四角い銃眼の中から
敵の機関銃手が私たちを狙っていたの
である。後方鷲湖嶺の頂上から望遠鏡
で戦況を見守っていた石川連隊長がト
ーチカの中まで見透した。

「危い。篠田がやられる。あの銃眼を
早く撃ってやれ。直ぐにだッ」

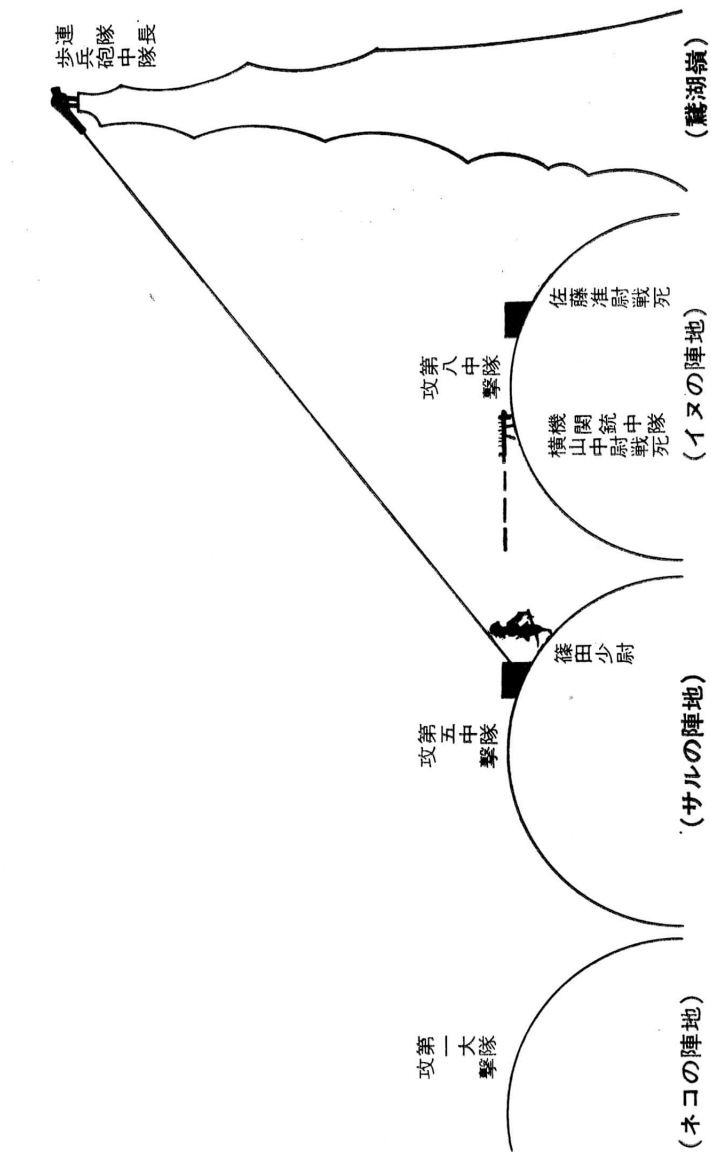
連隊長は大きく傍にいた歩兵砲中
隊長に命じた。千米近い距離である。
しかも銃眼の高さと私たちの頭の高さ
との差はどう見ても二十糎足らずであ
る。果して撃てるだろうか。砲身が一
ミリメートルの千分の一でも下がりす
ぎると、日本軍を撃つことになるのだ
う。然し歩兵砲中隊長横中尉はこの至
難の業を自信をもって遂行してくれた
のである。

私は目の前で訳の分らない大音響を
きいた。そして爆風で体が五、六米吹
き上げられそこそこと地面を転が
るのを感じた。伏せたままの姿勢で
見上げると、今までせいぜい電車の窓
くらいの大きさだった四角い銃眼が何
と畳二枚分くらいの楕円形の穴にかわ
っていた。そして今度は、すぐ目の前
のその穴の下際へ、日本軍の機関銃弾
が命中しはじめたのである。もちろん
私たちは立つことはおろか頭をあげる
ことも出来ない。伏せている私たちの
頭の上すれすれに機銃弾が通過してい
るのである。頭を少しでもあげると頭
蓋骨が木ツ葉微塵に飛び散るだろう。
私たちは神技のような射撃ぶりに舌を
まきながらその弾著を見守っていた。

撃っているのはあの横山中隊長だろ
うか。私は攻撃前進の直前に見た横山
中尉の微笑を思い出していた。

射撃が終った。私は左手をあげる。
立つからもうこれ以上撃たないでくれ
という合図のつもりだった。

「さあ行くぞ。号令をかけると手榴



弾がくるから黙って行く。ついて来いよ」

軍刀を片手に破壊されたトーチカの後ろまで行ったが広い陣地の中はどうしたことかひっそり閑として人影一つ見えない。おかしいな、逃げたかな、と思わず気を許して足元の塹壕を飛び越えようとした。と、そこに敵兵が、缶詰のイワシそっくりに、ぎっしりつまって私を見上げていた。どの顔も、目は三角に口は耳まで裂けて見えた。手に手に垂直に立てた銃剣の先がすすきの葉のように鋭く光っている。

日本軍の砲撃にそなえて壕内にひそんでいた彼らは、私が号令をかけないで入っていったものだから足音がするまで気がつかなかったらしい。お互いに白刃をもって顔を見合わせた以上どっちかが死なねばならないのが古来戦場の控である。

ツガーノ

さすがに勇猛の間こえ高い広西の兵隊だけあって隊長の号令一下、一斉に塹壕を飛び出すと私の前に立ちちはだか

った。隊長らしい人物を中心にして半円をえがくと銃剣の切先をびたりと私の胸に向けた。その数、約二十人。味方は、と思っで見まわすと私一人である。矢張り誰もついてきていなかったのだ。ええい、己れの不徳の致すところだ、こうなれば将校の意地だ、見殺しにされてたまるものか。

「さあ来い」

私は軍刀を正眼に構えた。拳銃を持つと臆病になるから持つな、というある先輩の忠告を守って、私は平素から武器として持っていたのは軍刀一本だけである。それを構えて敵兵二十人と相対した。

隊長らしい男を正面にして半円形は次第に縮まってきたが、私との間隔二米ほどのところまで来ると動かなくな

った。

辛い、不安は少しも感じなかった。しかし宮本武蔵みたいな剣術の名人でもない私は彼らをバタバタと斬り倒せるとも思っていなかった。あるのは作戦要務令綱領が教える「必勝の信念」

であった。

前田当太郎先生の教訓

そしてそれを裏付けたものは戦場に来る直前、出身校の先生方に挨拶にいったとき、教練を習った前田当太郎先生が教えて下さった言葉である。

「敵の弾丸は絶対に君には中らん。中るかもしれないと思っっている人には中るんだ。弾丸は絶対に中らないという強い信念をもっていたら絶対に中らん。その信念を持つんだ。弾丸は絶対に中らん。」

繰り返し繰り返し先生は真剣に教えて下さった。叱りつけるような強い語調であった。

私は戦場に来て弾丸の下をくぐる日が多くなったが、どんな時でも前田先生の言葉を忘れたことがなかった。そして戦場の生活が長くなるにつれて次第にそれは私の信念となっていた。

精悍な面魂をもった敵の隊長と私の距離は二米のまま動かない。闘志に燃

え、体力にも武技にも自信のあるらしいこの男が部下の二十人に先んじて最初の刺突をかけてくることは分っていた。私の剣尖は必然的にこの男の眼に向けられた。

私は徒らに相手の刺突を待っていたわけではない。機を制して積極攻撃に出れば勝利は更に確実であろう。然し正直なところ身を挺して剣の林の中へ飛び込むには私の修行はまだ足らなかったのだ。一步でも半歩でも前に出なかったが自分の意志に反して両足は固く地面に吸いついて離れないのだ。

彼我の精神力が伯仲しているのである。敵も銃剣を構えて歯を喰いしばっている。少しでも隙を見れば襲いかかってくる気迫は充分である。

そのようにして、どのくらい時間がたっただろう。私は十分や二十分はなかったような気がするが実際は三分ばかりであったそうだ。私の剣尖が一ミリばかり前へ出た。やっと一ミリである。たったの一ミリである。然しその瞬間、相手の剣尖が同じく一ミリ退く

のを見逃さなかった。

「いける、ノ」
と思った。

もう一ミリ、もう二ミリ、もう三ミリ。たったの三ミリである。然し全精魂をそこに凝結した命の三ミリだ。相手の剣尖は矢張りその分だけ退く。今だ、

私は軍刀を振りかぶって跳込むと相手の頭上に打ちおろした。その時相手は無意識に、（恐らく無意識にであろう、意識的には部下の前でこんなブザマな真似は出来ないであろうから）、まだ軍刀が頭に触れもしていないのに銃剣を放り出して両手で頭をかかえろと地面に俯伏した。それを見ると残り

城壁を守って、敵必死の抵抗

天晴れ松岡軍曹

しかし陣地の壕内にはまだかなりの敵が残っていた。群集心理とは恐ろしいものである。第二分隊、第三分隊が

突入するとその人数に比例して入替りに敵兵は逃げた。所詮人間は窮極までくると個人が単位ではなくして全体を構成している一細胞にすぎないことを立証するのだろうか。

第四分隊が突入してきた。このとき予期せぬことが起った。分隊長松岡軍曹が先頭になって突撃路を入ってきたとき勇敢な敵の軽機関銃手が一人、交通壕を迂回して私たちが気付かないうちに陣地のずっと奥の突角の銃座で射撃準備をしていたのだ。そして松岡軍曹の真正面から不意にチェコ式軽機をぶっ放したのである。松岡軍曹はノケ反った。敵はしめたと思っただろう。然しそれは敵弾をさけるための即妙の動作だった。彼はバネのように体を倒しながら手榴弾を発火して敵に投げつけていた。狙いは誤たず轟然と起る爆の引共にこの健気な敵射手は軽機関銃音と鉄を握ったまま戦死した。

左第一線の第二小隊も陣内を制圧した。はじめ丘の上には一つしかないと思われていた陣地が、実は後方にもう

一つ構築されていたため予備隊の第三小隊がこれを攻撃して占領した。

このようにして第五中隊は無事サルの陣地全体を占領することができた。落ち着いて陣地の中を見廻すとあちこちに手榴弾が人間の背丈以上の高さにピラミッド形に積んである。誰かが、捕虜になった十数人の敵兵を丸太の棒の柱に縛りつけた。その中の一人が大声で泣きながら叫んでいる。殺されると早合点して命乞いをしているのである。

ネコの陣地は、第一大隊が攻撃して占領した。イヌの陣地へ機関銃中隊が進出してきた。私はさきの的確な射撃を思い出したので横山中尉と一言はなしてみたくなくなったが見当らない。機関銃中隊の兵にたずねると、「横山中隊長殿はー」とまで云ってからふと口をつぐんだ。不審に思っただけその兵の顔を見ると、彼は二、三度深呼吸をするようにしてから、

「戦死されました、ノ」
どなるように叫んで走り去った。

の敵兵たちは、これも恐らく無意識にであろう、さっと踵を返すと背中を見せ駆け出したのである。

「うわーッ」

突如私の後ろから喊声があがって日本軍が一斉に突撃をはじめた。私の小隊の第一分隊である。私を先頭にして敵を追う。私と特に親しかった古年兵の藤崎兵長が私の横にびったりと寄添ってきた。私の身を案じてくれていたのである。

敵の逃げ足の早いこと。諦めた兵士たちは追うのをやめて小銃を撃ち出した。一群れの敵兵は日本軍の小銃弾が跳ね上げる土煙の間を縫いながら雲を霞と常寧城の中へ逃げこんでいった。

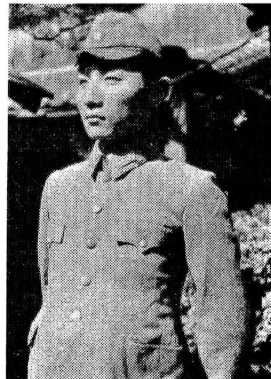
第九中隊の死闘

サルの陣地から東方約一キロメートルのところに常寧城が見下ろせた。市街は碁盤の目の如く整い、周囲は堂々たる城壁にかこまれている。四つの城門には子供の頃に見た絵本の竜宮城を思い出させるような豪華な楼台がついている。

その日の午後、第三大隊がこの城門の一つを攻撃した。楼台から撃ち下ろす敵機関銃の掃射を物とせず平地の上を散開して突撃また突撃。敵もさすがに伝統ある第六十師である、わが砲撃で楼台が斜めに傾き遂にはくずれ落ちたがそれでもなお重機関銃の射撃をやめなかった。

硝煙の渦巻く中を城壁にとりついて梯子で登ろうとするのは第九中隊らしい。上からは敵が手榴弾を投げおろして必死に攀登をはばみ、そのため幾んどなく立てられた梯子の下に横たわる日本兵の戦死者の数が次第にふえてい

著者の軍隊歴



復員当時の篠田中尉

昭和17年2月1日、中部第22部隊に入隊。同年4月甲種幹部候補生採用試験に合格、5月久留米予備士官学校に派遣される。10月同校卒業。見習士官となって原隊に復帰。昭和18年2月第34師団（樺部隊）歩兵第216連隊に転属を命じられる。第34師団司令部は中国江西省南昌にあり連隊本部はその西北30軒の安義というところにあった。

連隊では第5中隊に配属された。同中隊の小隊長として常德作戦、湘桂作戦、敵中突破作戦に参加、広西省全県にまで進出した。

昭和20年8月15日終戦。終戦後は南京の揚子江対岸で帰国命令を待ち、翌21年2月1日部隊は上海から乗船した。乗船の前日著者は大隊長から下士官7名兵20名と共に呉淞第五兵站勤務隊要員として残留を命じられ同年6月10日まで同部隊副官として勤務した。10日佐世保に上陸、人事係曹長と共に部隊の残務整理を終えて一週間後に復員。

昭和22年11月、大阪府立池田高等学校教諭となって今日に至っている。担当科目は英語。

った。

遂に三人の兵が城壁の上にのぼって日章旗を打ち立てた。此所を拠点にして城壁は我が軍の手に帰するかと思われたが敵は執拗にこの地点に射撃を集中し一人が戦死、あとの二人も負傷したらしい。やがて次々と梯子は城壁の上の敵にフットボールのように蹴飛ばされて倒れていき、死闘に次ぐ死闘を繰り返しながら日が暮れた。

城の東側には二百十七連隊がおり常寧は完全に日本軍に包囲されていた。そのため逃げ場を失った敵が必死の抵抗を試みたと云える。翌十月一日には私たち第五中隊を含む第二大隊も参加して城内に突入することになった。「あしたは市街戦や。大阪の兵隊は市街戦には強いで」

私に聞かせて安心させてやろうと思っているのか、そんなことを云いながら兵士たちは、敵が掘った塹壕の中で眠りについた。悲壮感が漂っている。ところが一夜明けてみるとあれほど頑強に抵抗した敵が城内からきれいに

姿を消していたのである。しかし夜間になぎれて余程いそいで脱出したものらしく機関銃や迫撃砲のような重火器類はそのまま放置されていた。それにしても、水も洩らさぬ包囲陣をしいていた筈の日本軍将兵は敵のあざやかな脱出ぶりを知ってただただ呆気にとられるばかりだった。

この戦場で二百十六連隊の戦死者は二十七名、そのうち二名はわが第五中隊の戦死者である。サルの陣地を占領したあとかなりの迫撃砲弾が陣内に落下してきたがそのため不幸にして二人の兵士が戦死した。広口兵長は死ななかった。野戦病院で奇跡的に蘇生した彼は内地へ還送されて元気な体を取り戻した。

論功行賞のあと中隊からは松岡軍曹が連隊長から賞詞をもらうことになった。

それにしても戦場では随分と人が死ぬものである。彼らは民族の平和と幸福を守るために捨て石となって死んでいった。当時の青年たちが理想に生き

るためにはこのようにして戦うより仕方がなかったのである。私の周辺で死んでいった前途有為な青年たちのことを思うと、いま生きているのが申し訳けない気がする。野心を抱いたり亭楽に耽ったりする気は夢にも起らない。戦死された方々の冥福を祈ってただつましく生きたい。そして、彼らが、日本民族のためにどのように戦い死んでいったかを、語りべとして語りつづけた。次の時代の人々にもそれを知ってもらうために。

終